



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|------------------|---|
| Title | 若年者の職業的自立支援という取り組みにおける札幌市勤労青少年ホームの可能性（中核を担える存在として） |
| Author(s) | 穴澤, 義晴; Yoshiharu ANAZAWA |
| Citation | 社会教育研究, 24, 69-82 |
| Issue Date | 2006-03 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/28567 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 24_P69-82.pdf |



若年者の職業的自立支援という取り組みにおける 札幌市勤労青少年ホームの可能性（中核を担える存在として）

穴澤 義晴

はじめに

私は、昭和63年より（財）札幌市青少年女性活動協会（第3章にて概要を説明）に在職し、今日まで、社会教育の現場で特に「青少年の社会的自立（青少年の社会参加・参画の推進）」を軸に、こどもの劇場・児童会館・青少年センター・勤労青少年ホームにて、青少年と直にふれあい、様々な事業を通し関わりを創ってきた。現在は、勤労青少年ホームの館長として、また、イベントコーディネーター（特にアートマネジメントの分野）として、青年と社会のかかわりについて取り組んでいる。

職場では、青年の直面する課題にいかに関与して支援していけるか、現状を把握し、対応する支援策を検討し、集団活動の経験を積ませることを中心に実践してきた。

現在、特に就学後の青年にとって、仕事に対する意識・かかわり方についても積極的に取り組んでいかなければならない状況下にあるという実感を持っている¹。今までは主に余暇活動・自由時間の豊かな過ごし方を視点に、支援方法として、グループワークという手法を用い集団活動の経験を積ませることで、意識を向上させ、経験作りを支援してきたが、かかわりに課題を抱えている青年の多くは、同時に仕事に対する前向きに向かっていけない課題も併せて持っているケースが多かったからである。

「余暇活動」と「仕事」、両方の課題を解決するためには、それぞれの切り口からそれぞれの方法で支援策を検討実践するのではなく、「豊かな人間関係の経験」が根本にあるという実感を青年とのかかわりの中で実感している。これは、二兎を追うもの一兎も追えずではなく、2つの課題の根本は、豊かな人間関係の構築なくしては、解決しえない課題であるということであろう。実際に、なかなか定職につけないで悩んでいた青年が、勤労青少年ホームでサークル活動を始め、2年後、サークル連絡協議会の役員を自主的に行うようになり、また、定職を自分で探し出したという例も複数例記録している。

今回は、特に若年者の職業的自立支援からの視点に着目し、支援状況の情勢をつかむと共に、勤

¹ 青年の生活全般において、利用者の3割が定職についていない青年であることがアンケート結果からも読み取れる現状である。

労青少年ホームのシステムと取り組みの実例を紹介し、中核を担える存在としての勤労青少年ホームの可能性について探っていききたい。

1 若年者の職業的自立支援の実態について

1-1 若年者の現状と職業的自立支援

昨今、NEETの増加が巷の話題となっている。NEETとはNot in Employment, Education or Trainingの略で、「職に就いていず、学校機関に所属もしていず、そして就労に向けた具体的な動きをしていない」若者を指し、現在、日本にはNEETに分類される若者の数は68万人と言われている。労働政策研究・研修機構副統括研究員の小杉礼子氏はニートを四つ類型化している。

I ヤンキー型

反社会的で享乐的。「今が楽しければいい」というタイプ

II ひきこもり型

社会との関係を築けず、こもってしまうタイプ

III 立ちすくみ型

就職を前に考え込んでしまい、行き詰ってしまうタイプ

IV つまずき型

いったんは就職したものの早々に辞め、自信を喪失したタイプ

以上より、NEETは、ひきこもりも含み、社会という枠から見ると、孤立した、または、孤立しかかっている若者であるということが言えるし、急速に数が増加していることと、年齢層が上昇していることがわかってきている。

では、社会から孤立した、または、孤立しかかっている若者に対する職業的自立支援を、一口に言えば、仕事に就いて収入を得、生活的に自立する若者を育てることであるが、社会の様々な立場では、彼らに臨んでいることが多少違いを見せるようである。一番身近な存在である保護者の多く、または、行政等は、安定した職業（正規雇用）に就くことを望んでいるが、しかし受け入れる企業側は、正規雇用を十分受け入れる体制にはない。ここにミスマッチが生じる。

このことだけが職業的自立支援の問題点ではないように現場では感じている。難関を突破して企業に就職をしたが、職場での人間関係がうまくとれず、早期離職する青年たちを数多く見ている。では、問題の根本は何か、社会教育の現場から言えることは、はじめに述べたが、「集団活動経験の少なさ」このことだけは、問題を抱える青年に共通の現象である。

社会教育の現場からの取り組みとして、若年者の職業的自立支援の方策は、人間力（コミュニケーション能力）の向上が大前提となる。併せて、職業的スキルの育成も行っていかなければならない。この2つのバランスをとりながら、個別の対応（ケースワーク・カウンセリング）から集団対応（グ

ループワーク)へ、段階に応じた対応が求められているように感じている。

1-2 国としての政策

行政はどのようにこの課題に取り組んでいこうとしているのかを、まず抑えておきたい。

1-2-1 軸として

「青少年育成施策大綱」(平成15年12月 内閣府)のなかで、職業的自立支援の必要性が取り上げられており、これを受けて、「若者自立・挑戦プラン」(平成16年6月18日若者自立・挑戦戦略会議)が提出された。これにより関係各府省は、連携して各施策の具体化を進め、アクションプランを取りまとめることとなる。

さらに、H17青少年の就労に関する研究調査(平成17年 内閣府)が行われる中、若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告(平成17年6月 内閣府)が提出され、各機関が連携を図り、包括的にこの課題に取り組む必要性がうたわれている。

1-2-2 厚生労働省の取り組みより(勤労青少年ホームを主管する府省からの視点)

「青少年育成施策大綱」より先に、厚生労働省では、ヤングジョブスポット事業(独立行政法人雇用能力開発機構実施)を平成14年より全国25箇所で開催し始めている。この事業は、職業に関するフォーラム・職業人とのふれあい事業を中心に、相談業務も行っている。また、この事業の規模を拡大する事業「ジョブカフェ」を「若者自立・挑戦プラン」のアクションプランとして経産省と協同で立ち上げている。特にジョブカフェに関しては、就職活動支援の様々な対応がとられているが、社会へ踏み出せない若者にとっては、多少敷居の高さが課題として残った。この課題を解決するため、平成16年に「若者自立塾」という取り組みも始まった。共同生活をしながら、職業に対する意識を向上させていこうという狙いがある。ここでは、対応できる人数に限られるため、さらに、ユースコーディネーター事業として、各地域において、課題を持った青年と地域を結びつける人材の配置を行っている。この取り組みが来年「ユースサポートセンター」として拡大実施されるようである。

1-2-3 北海道・札幌市の対応

北海道は、職業的スキルの育成を軸に、札幌および中核都市(札幌・旭川等)を中心に民間企業とタイアップし事業展開してきた。また、「ジョブカフェ」の運営も積極的に行っている。

札幌市も雇用推進課が職業的スキルの育成を軸に、事業展開を図り、就業サポートセンターを設置し、独自の運営を行ってきた。

1-2-4 課題として

まず、この取り組み自体が本格化されたのは、平成14年という、新しい取り組みであり対策を試行錯誤している段階にあるということであろう。課題を抱える青年は、少しのきっかけで、就職活動に向かう者、他者とのコミュニケーションを図ることから始めないといけない者と多種多様であるという性質からも、この取り組みの難しさが伺える。

対策の第1段階として、少しのきっかけで、就職活動に向かう者を中心に、カウンセリング・職業的スキルを育成する事業を中心に行ってきた（ジョブカフェ・ヤングジョブスポット等）。また、縦割り行政の弊害もあり、私の地元札幌では、同じ内容の取り組みが平行して存在していた。また、若者自立塾という、他者との関係に踏み込んでいけない青年を中心とした共同生活を中心とした取り組みも行われ始めたが、実はその中間の層の青年たちが多いことは、現場として実感している。

2 札幌市の勤労青少年ホーム（レッツ）の取り組み

次に、札幌の勤労青少年ホームを中心とした取り組みを見ていくこととする。

2-1 レッツとは（施設運営と運営システム）

「レッツ」とは、札幌市勤労青少年ホームの愛称である²。札幌市内5箇所に設置され、「青少年の健全な育成および福祉の増進を図ることを目的」として、15歳から29歳までの青少年（勤労者や専門学校生等）を対象とし、ロビー活動、サークル活動、各種講座、イベント活動等の支援を行っている。

札幌市勤労青少年ホームは、福祉施設が十分に整備されていない中小企業等で働く若年労働者の福祉増進のため、職業技能や一般教養の講習会、演劇鑑賞や音楽会の開催、室内娯楽および運動施設利用等のレクリエーションなど余暇活動の提供、職業・生活相談などを行う場所として昭和39年6月に初めて設置された³。

2-1-1 青少年センターを核とした独自の運営体制

レッツ5館のネットワークの中核に位置し、札幌市における青少年育成の中核施設であるのは青

² 昭和62年市民から公募

³ 第1号は遠友夜学校跡地に建設された札幌市中央勤労青少年ホーム（レッツ中央）であるが、現在でもレッツ中央内に「遠友夜学校記念室」が設けられ、昼間学ぶ機会のない店員・徒弟や学校に行けない貧しい子どもたちを対象にした学校を運営した新渡戸稲造の精神や当時の様子が紹介されている。また、(財)札幌市青少年女性活動協会は、遠友の精神とされる「人が人を作り上げる、ともに生きがいを感じられる」生きた施設作りを、レッツ・青少年センターの施設運営における理念として掲げている。

少年センターである。平成12年にオープンした複合施設札幌市生涯学習総合センター(愛称:ちえりあ)の一部であり、15歳から29歳までの青少年の活動支援と一般も含めた部屋の貸し館業務を行っている。既存の青少年センターとレッツ発寒(発寒勤労青少年ホーム)を併せさせたことにより、貸し館に特化していた従来の機能に、他のレッツで行っている事業としての機能が加えられ、人材育成事業⁴、ロビー事業⁵、利用者協議会活動(愛称:DONUTS、詳細は後述)、短期事業、イベント、情報、相互学習、事業研究が行われるようになった。

青少年センターのランチ施設でもあるレッツは、地理的にも市内に分散されている。レッツ中央(中央区)、レッツ円山(中央区)、レッツアカシア(東区)、レッツポプラ(白石区)、レッツ豊平(豊平区)

2-1-2 活動場所の提供ではなく、事業実施を主体とした館運営

レッツを運営するにあたって共通して重視されているのは、単なる活動場所の提供ではなく、事業実施を主体とした施設運営である。青少年センターが新設されたときに加えられた「レッツの機能」とはこの点を指す。活動協会が採用している「グループワーク」という手法を生かし、「事業を通じた『人』づくりと『人』とのつながり」を育むように事業を展開している。具体的には、利用者協議会活動の充実や、利用者である青少年主体のイベント開催の支援、その他社会参加・参画を促進するような働きかけが行われている。職員には、青少年に対して同じ目線で語りかけ、関わり合い、自らが媒体となって人の輪を広げていく支援することが求められる。青少年個人が幅広い世代からの「認知」(認められる喜び)と社会における「役割」(必要とされる喜び)を自覚し、「人と関わることの大切さ」を体験する中で、「関係作り」をお互いにはぐくみ、推進している。

「関係作り」の手法として、レッツの利用者は主に、レッツで活動するサークルに所属している。各サークルは館内において利用者協議会(愛称:ドーナッツ)を組織し、青年交流事業を企画したり、新規利用者の獲得を自主的に行っている。館の運営に対する要望もまとめる話し合いも積極的に行っている。さらに、各館の利用者協議会は、他館と連携をとり全館利用者協議会(愛称:ドーナッツファクトリー)も組織している。

こうした個人だけでなく、地域と館や利用者協議会との関係作りに力を注いでいるのも特徴的である。各館の特徴的な取り組みとして、青少年センターでは周年記念事業(生涯学習総合センター

⁴具体的には、国際交流を推進する青少年や野外活動指導者、イベントの企画運営を通じてまちづくりに積極的に関わってほしいとする青少年、地域事業の担い手となる青少年ボランティアの育成がある。これらを通じ、青少年が主体的に「人と関わってほしい」という姿勢を育てている。

⁵青少年センターにおいては、さまざまな市民の利用がある複合施設であることを生かし、青少年の活動を広い世代の方に理解してもらえるような展示や催しを実施したり、サークル利用の青少年に限らず、自主学習活動の場として来場している中高生・大学生の居場所としての機能を担っている。職員との関係作りから、個人の「何かしたい」という気持ちを伸ばすことのできるような働きかけを行っている。ロビー利用の中高生が卒業後、青少年センター利用者協議会加盟のサークルへ加入したり、ロビーイベントの実施にかかわり自己実現や発表をしているのも特徴的である。

全体の事業), レッツアカシア・ポプラ・豊平では「ホーム祭」, レッツ円山では「ふれあい駐車場」「一坪展」, レッツ中央では「サントクロースプロジェクト」「トマレンジャー」(詳細は後述)があげられる。また、その他サークルによる企画、地域向け事業、ボランティア事業が利用者の主体的な企画運営によって行われている。企画に関わる利用者たちは、地域に生活する人や企業に足を運び、広報活動、協力の依頼を行うことを通じて、地域ニーズをつかみ実行委員会の運営に反映させる。また、地域に自分たちの活動について知ってもらうこと、地域の理解を得ることを心がけている。

後に詳細を述べるが、今年度から事業部分の業務委託を受けたヤングジョブスポット事業も、レッツがこれまで取り組んできた「青少年の社会的自立」としての職業的自立支援の一環である。

青少年センター・レッツにおける「青少年の社会的自立」を目指した取り組みをまとめたのが、次表である。

| 青少年の意識 | 青少年の社会的自立段階 | 青少年センター・レッツの機能 | | | |
|----------------------------|--|---|----------------------------------|---|--|
| | | 青少年活動研究企画開発機能 | アプローチ機能環境の設定 | ワーカーによる対応 | ネットワーク機能 |
| 何かしたいという欲求を持たせるために | 自由時間活動(趣味)を選択(青少年センター・勤労青少年ホームと関係を持つ) | 青少年の意識調査 自由時間活動(趣味)の情報収集 | | | 関係団体・施設からの情報集約 情報の発信 情報誌の発行 インターネット |
| 集団活動への興味を引き出すために | 意識調査 | サロン活動 | 個人とワーカー・個人と個人の関係の構築 | 情報コーナーの設置 利用者協議会との連携 | |
| | 集団活動開始 | 各種講座の企画(集団活動のきっかけとして) 集団活動の企画(集団活動疑似体験の場として) | 講座の実施 サークル活動 | | 集団メンバー同士の人間関係の構築 |
| 集団活動をしたという欲求を引き出すために | 活動調査・検証 自己啓発事業の企画 | 自己啓発事業 | 心理的欲求・社会的欲求をかみ合わせた上で、集団の決定事項を促す。 | 登録団体との連携 利用者協議会との連携 | |
| 集団活動をおもしろくしたいという欲求を引き出すために | 集団運営における積極的参加 (集団における自分の役割の認識と他者の認知) (活動の目的・目標の共通理解) | 活動調査・検証 自己啓発事業の企画 | 人材育成事業 | 集団活動の活性化の必要性を伝える。 | |
| 集団活動を広めていきたいという欲求を引き出すために | 集団の外に向けた働きかけ 後輩の育成 | 活動調査・検証 青少年交流事業の実施 | 利用者協議会 青少年交流事業 | 交流における集団活性化の重要性を伝える | |
| 他団体への興味を引き出すために | 他団体との交流への積極的参加 | 活動調査・検証 世代間交流・地域交流事業の企画 社会参画事業の企画 | 世代間交流 地域交流事業 社会参画事業 | 青少年センター及び勤労青少年ホーム登録団体としてネットワーク機能に参加(青少年グループ活動を支援) | |
| 社会への興味を引き出すために | 世代間交流への積極的参加 地域交流への積極的参加 | 活動調査・検証 世代間交流・地域交流事業の企画 社会参画事業の企画 | 世代間交流 地域交流事業 社会参画事業 | 関係諸施設との連携によりボランティア事業、国際交流事業のタイアップ | |

2-2 効果について

2-2-1 日常の活動より

先にも述べたが、青年たちは、日常、レッツを、仕事が終わった後の、また、家以外での居場所として活用している。私たち職員も、信頼関係ができた青年たちには、積極的に「おかえり」と声をかけている。

そこで、青年たちは、サークルという団体に所属し、サークルの活動ばかりでなく、生活全般について・仕事について・恋愛について様々な相談や手助けしあえる関係作りを行っている。サークルに所属しない青年もロビーという居場所で、何人かでグループが出来上がったり、グループになるきっかけを職員側が作ったりしている。

ロビーは、サークル同士の出会いの場・接点としても活用され、特に同じ曜日に活動するサークル同士は、活動が始まる前・終わったあとに、最初は職員のかなりしつこいきっかけづくりを媒介に、よい関係作りが育まれている。

食事とタバコは、関係のきっかけを生み出すよいアイテムであるというのも、日々のロビーワークをしていての実感である。食事はともかく、タバコを積極的に勧めているわけではないのであしからず。ロビーにて軽く食事を作り、今までほとんど関係が造れなかった奴に食べるか？と声をかける。すると、いいすか？といいながら、よって来る。材料代は出せよ！と変に恩を売ることをせず、食事を薦める。食べるのを眺めながら、近頃どうよ！と声をかける。今までみせたことがない笑顔で、食べるのも忘れて話を続ける。決壊したダムのように……。

また、喫煙場所では、もっとヘビーな話題となったりする。近頃、巻は禁煙運動が定着し、喫煙場所は外の建物の片隅にぼつんと置かれている。そこで、ロビーでは、仲間以外とは決して話しをしなかった奴が、タバコの煙を吐くように、仕事について・親について語りだした。回りの奴らも、私と彼とのその会話に自然と入ってくる。いつしか、人生についての討論会の場所へと形を変えていた。

きっかけとタイミング・ツールはどうあれ、居場所を中心とした日常活動の中に、職員が様々なアプローチをしていった結果、彼らにとって、安全で、安心な心を開ける居場所になりつつあるのは重要である。また、困ったときに助けてといえる関係、助けてやろうかといえる関係が生まれている。

2-2-2 サンプラプロジェクトとお泊り会企画

レッツ中央では、各サークルは利用者協議会に加盟し、1年に1度、地域に対するイベントを企画実施しなくてはならないというおきてがある。(レッツ全体では、各レッツが積極的に地域と関わっていこうという方針があり、これを各レッツは様々に方法化している。)

日頃の活動をベースにそれを地域の人たちに伝えていこうというのが、押さえとしてはある。(茶

道サークルによるお茶会の出前事業・バスケットサークルによる小学生対象のバスケット教室 etc)

もう一つの切り口として、参加した青年たちが新鮮な驚きを感じ、また、企画立案において、日常の活動を越えて、対等な立場で創り上げる関係作りが持てる内容を、提案した。

*サンタプロジェクト

近所の保護者がレッツにプレゼントを持って来る。青年たちはサンタになりそのプレゼントを各家庭に届けるというイベントである。ただ家に配布して回るのではなく、事前に要望のあった各家庭の保護者と演出プランを練る！この行為がこの事業を継続させている要因である。各家庭に青年がお邪魔することで、家族・生活を感じ、さらに、保護者と共にクリスマスの演出プランを練ることで、子どもに対する愛情を直に感じているようである。あんな家庭がもてたらなあ！と打ち上げの席で話をする姿が印象的であった。

*お泊り会

近くの小学生を招き、1泊2日のお泊り会をレッツ中央にて行う企画である。土曜日の午後子どもたちが集まってきて、日曜日のお昼の解散まで、楽しめる企画は？夕食は？朝食は？具合が悪くなった子どもたちの対応は？保護者の説明会は？と3ヶ月もかけてあーでもないこーでもない話し合いを続ける。

当日、慕ってくる子どもたちに可愛さと愛情を感じ、また、子どもたちの自由な発想で作られるダンボールハウス作りに新鮮な驚きを感じているようである。中でも、普段は好き勝手に振舞っている青年が、好き勝手に振舞う子どもの世話を、手際よく行い、周りの青年から賞賛されている姿は、印象的であった。

この2つの取り組みは、今では青年たちが、今年もやろうと積極的になっている。企画参加しやすさ（敷居の低さ）と、達成感、地域からの賞賛、新鮮な感動が彼らの欲求を満たしている結果であろう。

2-2-3 町内会役員との忘年会企画

平成16年秋、利用者協議会の役員から、町内会の人と「忘年会をしよう！」という案が挙がってきた。ここ数年、1サークル1アクションをうたい文句に、地域へ向けてイベントを行ってきた結果、特に町内に口を聞いてくれる役員さんとはかなり顔見知りになり、その取り組みからの自然流れとして青年たちから出た企画であった。町内の役員さんもその声かけに快く応じ、この地区から出ている市議会議員まで引っ張り出してきた。また、経費的には、差し入れが多く集まった。（これは青年たちがしたたかに期待していた面もあったが、今までの関係作りがうまくいっている証拠でもあ

る)また、社会福祉協議会が、イベント費の一部を援助するので、車椅子の高齢者も参加させていた
ただきたいという依頼が舞い込み、青年たちは、経費援助に釣られたわけではないが、快く引き受
けた。(これは、実は職員側が仕掛けたアクションである。)この結果、道議会議員のおまけもつい
てきたのである。

当日は、なべを囲み、自己紹介以外はノンプログラムで進行した。通常、議員さんまで引っ張り
込むと、仰々しい挨拶や、進行を考えてしまうが、わざと親睦を深める忘年会ですから、というの
を強調し、議員さんを含め、町内会の方々も、この流れには共感していただようである。

協議会役員の青年たちも、忘年会という切り口で、普段はこういった会には姿を見えない層の青
年たちをうまくだまして集めてきた。最初は戸惑っていた青年たちも、なれないお酌や、車椅子の
手助け(2階まで車椅子の高齢者を引っ張り上げる)をしているうち、しきりに感謝の言葉やレッツ
に集まる若者は捨てたもんじゃない!の言葉にすっかり気分を好くし、ちゃん付けで呼び合うよう
になる始末であった。

なかでも印象に残ったのが、町内会役員と利用者協議会役員自然と始まった真剣な議論である。
中身は、「町内会の住人や利用者協議会の会員をいかに活動に巻き込むか!」共通の悩みを持つ同
士の深い議論が展開された。役員だけが苦労している愚痴から話は始まり、役員としてテンション
の保ち方、どうやったら一人でも多く積極的に会の活動に参加するのか、後継者の育成まで、「あき
らめずに、いろんな接点を見つけて笑顔で声掛けをしていくしかない!」の言葉に共感しうなずく
町内会役員の姿が印象的であった。

参加者 青年 26名(うち企画者8名)

町内会 28名

12月18日(土) 19:00~22:00

レッツ中央 講堂にて

2-2-4 街創造スタッフの活動

今までは、青年の居場所から地域に向けて事業を発信するスタイルをとってきたが、それと複合
的に行った取り組み、アートマネジメントという手法を使い、青少年の社会参画により、街づく
りを目指した取り組みである。パフォーマンスで街をひっくり返そう!を合言葉に意図的に集団を
形成し、その目的のために、青年をレッツに呼び寄せ、幅広い青年層の獲得と取り組みである。

街創造スタッフは、パフォーマーと呼ぶ街のアーティスト・表現者(毎年60団体)と関係を持ち、
同時に舞台である街に住む・生活する人々(商店街の人たち)と関係を持ち、お互いの欲求を汲み
取り、行政を巻き込み、創造する街に対する自分たちの欲求の軸(コーディネーターとして)を確
立し、イベントの構成を行う。

青年たちは、イベントを通して、街の人を知り、認知し、街のシステムを実感し、自分たちの存

在意義を認識する。「便利なだけの街だけだと思っていた札幌市,実はこんなにももしろい人が居て,こんなに実は混沌としていて,好きになりました。この街でこれからも暮らして生きたい。」～実施委員長の打ち上げでの言葉～に代表されるように,関わりが育む,青年の社会的自立の1例であろう。

この取り組みの更なる効果は,イベントを創り上げるスタッフとそれに行政・企業を絡ませて,イベント開催規模を大きくした点にある。行政・企業側は,札幌中心街の活性化という視点・芸術文化の振興という視点・立場でこのイベントと関わる。青年側と行政・企業のコーディネーターを職員が行う。青年は自分たちの取り組みが想像以上の結果を生み出す驚きを実感することとなったようだ。

また,この取り組みは,頑固に10年以上続けてきた。10年のうちに当然関わる青年たちも入れ替わり,行政・企業側も入れ替わってきたが,一つのある信念「投げ銭文化を作り上げよう」という共通の課題を実現するために毎年取り組んできた。結果,13年目にして,投げ銭の実施までこぎつけることが出来た。これは,社会のシステムは,自分たちでは変えようがないという,妄想を打ち破るのに十分な実例として青年および行政・企業側に達成感と,あくなき挑戦意欲を掻き立てる結果となったようである。

街創造スタッフ

構成メンバー:企画メンバー(活動1年間)20名

当日スタッフメンバー 80名

活動期間:1年間

定例会 毎週水曜日 19:00~22:00

全40回

他臨時会随時

活動場所:青少年センター

レッツ中央

実施してきたイベント

さっぽろふれあいフェスタ ストリートパフォーマンスカーニバル in 大通

平成5年~平成12年 全8回

毎年 9月1週目 金土日

会場 大通り公園

規模 パフォーマー参加 60団体 500人程度

一般観客 7万人(平均)

だいどんでん ストリートパフォーマンスフェスティバル

平成13年～現在 全5回

毎年 9月1週目 土日

会場 札幌駅前・北1条通り 歩行者天国を中心に各商店街にて

規模 パフォーマー参加 80団体 600人程度

一般観客 7.5万人(平均)

2-2-5 ヤングジョブスポット事業からのアプローチ

職業的自立支援の切り口から、ヤングジョブスポットさっぽろ(厚生労働省:雇用能力開発機構よりの受託事業)における事業の企画立案・実施を今年度より行っている。

いままで、余暇活動の切り口が主だった青年へのアプローチが、仕事という切り口を踏まえ、それに参加する青年層、レッツで受け入れる青年層の幅の拡大が進んでいる。

年齢層についても、勤労青少年ホームでは15歳～29歳までの働くおよび求職中・専門学校生が対象であったが、この取り組みでは、15歳から35歳程度と年齢層の幅も広げての受け入れを行っている。

仕事に関するフォーラム事業および職業人とのふれあい事業を大きな柱として年間96の事業を、全レッツを会場として行ってきた。

レッツなりのアレンジとして、仕事について悩む青年同士の事業展開ではなく、NEETに代表される社会的に孤立している青年はもちろんのこと、定職についている青年・学生・フリーターを事業に巻き込むことにより、また、幅広い年齢層を意識して事業に巻き込むことにより、仕事に関する認識について、同世代の幅広い観点から自己認識が図られるシステムを構築している。また、社会との接点として特に力を入れているのは、元気な大人を彼らに紹介する取り組みである。これは、参加する彼らの身近にあこがれる存在や刺激だけでなく、大人の側も、あこがれられる大人としての生き方を再考する相乗効果を生む結果となっているようである。

職業的スキルではなく、人間力(コミュニケーション能力)に目的のウェートを置いたことにより、職業的自立支援機関の底辺の役割と早期離職者の対策等の2つの役割をレッツが持ちえることになった。

2-3 効果のまとめ

日常の活動から、地域への社会参画、職業的自立支援の取り組みと、現場の実践例を見てきたわけであるが、日常活動で培われた関係が、彼らの安全で安心な居場所であり、その場に愛着があるからこそ、その場を守るために、その場を広げるために、他者との関わりを抵抗なく受け入れる結果を招いているといえる。

個々人は、自己開示を通して、認知および役割の欲求が満たされ、信頼関係が構築されたということである。こういう個人の関係は、属する集団の関係にも波及し、団体（ここでいうサークル）が、団体として開示（外に開けた団体・広くメンバーを受け入れ、または、他団体との協力体制を積極的に行う）し、属する集団連合体（ここでいう協議会および館として）で、認知および役割の欲求が満たされ、信頼関係が構築されることにつながっていく。この広がりが館の中だけでとどまらず、地域社会という枠も視野に入れた状態を作り上げることで、青年個人は、社会の仕組みを知り、個々の役割を、存在価値を得ることとなっているようである。これが青年の社会的自立のプロセスであるともいえる。

この取り組みで、コーディネーターとしての職員の役割上、大切にしなければならないことは、安全で安心な居場所作り 自己開示のきっかけ作り 認知と役割の欲求の充足 そして、この取り組み自体が自立するための循環システムの構築であろうと思われる。

2-4 課題について

現場から浮かび上がる課題としては、課題を多く抱えた青年が増え続けているということと、集団作りの支援が難しくなっていることである。今までは、集団にグループワーカーとして、きっかけを与えるだけでよかった支援が、個人に寄り添わなければならない状態の青年が増えてきている。集団活動の経験不足が大きな要因の一つであると言える。

また、各都道府県とも予算の縮小が進んでいる。勤労青少年ホームにおいても例外ではなく、対応する職員を強化する状態にはない現実もある。

対応策としては、関係する機関との連携が急務であり、根本的には、社会から孤立する青少年への対応ではなく、孤立する青少年を作らない対応（青年対策だけのネットワークではなく子育て支援から子供の居場所作り支援も含んだ包括的なネットワーク）が今後重要なのではないかと推測できる。

3 自立支援の包括的な見地から

第1章で紹介した国の施策である「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」(平成17年6月 内閣府)の意図しているところも、先に述べた、各地域において、社会から孤立する青少年への対応のネットワーク作りと併せて、孤立する青少年を作らない対応も視野に入れたネットワーク作りである。

この取り組みも、札幌では現在進行中である。

3-1 財団法人札幌市青少年女性活動協会の取り組み

札幌市は、昭和55年に、「主として札幌市の青少年婦人を中心とするグループ活動の振興を図り、もって青少年の健全育成と青少年女性の社会参加の推進を図ること」を目的として財団法人札幌市青少年女性活動協会を設立し、次の各事業を行ってきた。

- (1) グループ活動の指導業務
- (2) 指導者の養成および登録派遣業務
- (3) グループ活動プログラムの企画立案の相談業務
- (4) グループ活動に関する調査研究および資料の発行業務
- (5) 福祉事業等に対するボランティア活動業務
- (6) 青少年女性関係施設の管理業務

(1)から(5)の事業実績を受け、徐々に(6)の青少年婦人関係施設の管理業務を徐々に伸ばしてきた。結果現在は、青少年センター・勤労青少年ホームを含む、児童会館・男女共同参画センター・野外教育施設・文化芸術施設の全114施設を管理運営するまでに成長した。

また、平成12年より財団独自の取り組みとして、アクションプラン「i(あい)プラン21」を策定し、施設間ネットワークを構築する取り組みを開始している。

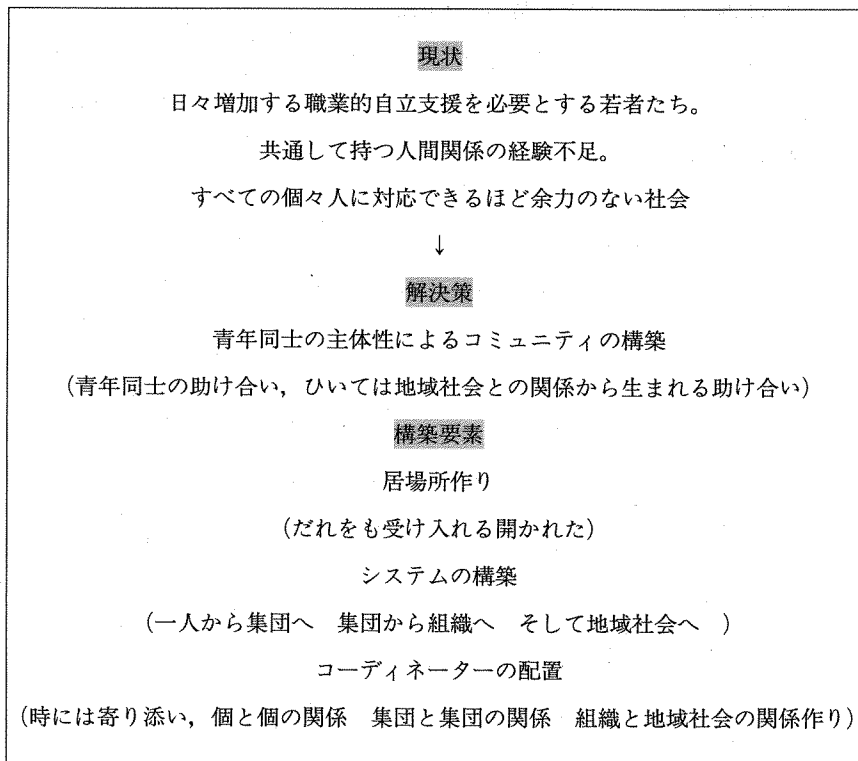
3-2 包括的な取り組みの現状

若者の包括的な自立支援の方策から判断すると、勤労青少年ホームが児童会館・男女共同参画センター・野外教育施設・文化芸術施設との事業連携を持てることは、非常に重要なことである。子育て支援からこどもの居場所作りそして職業的自立支援が一本の流れで結ばれるのである。ただこの流れは、協会内部のネットワークだけで成立するわけではなく、それぞれの施設が持つ他機関とのネットワークを大切に活用しなければならないのはいままでもないことである。

現状では、児童会館とのネットワークが構築されつつある。勤労青少年ホームの青年たちと児童会館の子供たちとの交流事業が行われている。今後中高生の居場所作りにおいて協同で取り組むことを現在検討中である。

4 まとめ

結論から言うと、若年者の職業的自立支援という取り組みにおいて一番重要なことは、課題を抱える者と仕事に対し生きがいをもち頑張っている者が触れ合え、関係し合える場を造り、且つその場が社会に開かれた状態をいかに造り上げるかが、この課題に対する根本の取り組みであると思われる。



この場が、中核となり、支援組織（職業的自立支援において特化した目的を持った）や地域社会とネットワークを作り、さらに、幼少期からの支援組織とネットワークを結ぶことにより、包括的な取り組みによる循環型の支援ネットワークが構築できる。

さらにこの循環型の支援ネットワークは、職業的自立支援だけではない青少年を取り巻く様々な課題を解決する可能性を秘めていると推測する。

札幌市においては、中核を担える場として青少年センターを核とした勤労青少年ホームが十分位置づけられるのではないかと推測する。